太戔
會席

噺雛形

後編

乙

へ遠13
1707
10止

門へ 13
1707
巻 10

横相新

伊勢傳

序

嵩嶽嶠の麓に有る人家

たゝ〻大よそ野豆畑耕しく

見るよりあく妙く珍(ちん)奇多集(あつま)り

高さ三百九拾余丈中年

甲乙を分て毎又拾番とさだる

集(つゝ)有よる是定(さだ)限(かぎり)なきむ

皇城をいはゝ家のもとし
愚うの小考なるも又ものの
嘲りとは為のものゝ春の
芽を出せる梅ひ草の花を
清香の咲もの高ゝ

常等亭
君竹撰

春嘲大集巻壹

常等亭君竹撰

巻頭

おろ月　清井

たるゝ西国の人京大坂見ぬ事なれば友達
元乃生まれよりさぶあてかぶよへ移りしんぶつのりさで
ばらふイヤさしてのゆもかりのさうゝ水車とふでけりの
を見て本さ伊ゞ京都より夜ゝまて大坂へ下る迄
とあらゝ水面で京合の流ゞアレく舟車どやりくと
ゆゝまりておまもそのと名のるかりのぞけば伊ゞ大坂

たいものがぐるくとあを天てハ浮あのんがらうさ与加
余りおそ病しさまアレハごらくめのてぎなと問ハ生ハ
おゆさうや迄おゆ花ぐらけ由くとうさ

第二　あてちがひ　不妙門

月法あてろ事さ友月さふと遠中ま天ハ合ま三ハくくく
ゆさ的ま色ぬどうおくにとあされまハサアア拾も与ろし
京門色よ陽ろおくくてちさの第ま一ろ名よ色てあり
まんゆよ多製の第ぐにしがおざるがろさ業よあいまれと
第ぐにひがりよおらくまれと与ろ堂ろ後田扇石紀

の次ぎは、の張番へ三吉の伝いきよ内へおぐりまんと呼ぶ
くよう、まもなくまぐ、おくへと使ひ、ひとを一通りのあらう
おりサテ、れ屋敷の、れ屋ごとへ、サアまへあげまんと
やがて、ぐんよ、きを、ひじをおして出さんなきゃ、呼ぶくと、一ツ
に入ぬ、ぬしが行ぐ、ものに、親父のらくらく、餅屋、風味、の外
あく、一向、唄へ、ものに、吐きんよもぢ、ちゃんぢ、ちゃ
ぢ、ちゃ、ぢ、ぢ、ぢ

くのあんらりまる四ようそだよりのりる鮮めさ吹く吸付
るひあらしよ我敷うの丸べさ寒くコリヤ生寒とまりもを
めらーさ

寸江　我得

流所をいぬる且那くの耳
京紙まやあるうんと考ゑ〜と乃江五俗ゑもトうそふ
てあるうまれば越姫がヨ、あのおさい辞こして姫小まりの
浮月りを流ようまそてドや

寸方　孤秋

よ拾っ花

去りとそんびさうくとよりの高ご浮るりドやコリヤ去去よ
物の陸利よ流まんうあてあんヤイ去去ゆーこまりほど
さ　ドうく
ヨ、〜く大分ござりまん　上和　ごりうとあてさう
よふ月ほさ　上和　宴流りを拾って来イコリヤ光ゆ流へ
なんがおとて物を乃まびたおごうけハ流ごうけ

寸六　森て叶　喰　瀬川

敵とちの位ありるご方塩所の月ゆいごうは日風
と思よハけうよ月ゆとれゆよりごゑ孝ゆ流しけうハ喰
物も月ゆせびあるりー歌のまはしとの下女おどよあて

入ものんぐ　おとをあらそふものでもなん　をを　をぐまいと
珊瑚珠のたばしきを建ぶ　ぶん　若まはて　若ちりちりのご
とく　敬方のまはりのかたなるのて　入ちみ　おれども　かのまる
ひぐらしひそかに　食ちゆ　ちん　毒を　入おき　例の　ありさへ　至
ぬるふりぎやさ　自　毒バチ　くとさぜ　出　れ　れへス　おれ　者と
猪部を　ちはけるとぞ　ぐくと　家ぐ　ぜて　押　まきて　死ご

ナレトー　自然　居士　ひる　化貨　秋　ふ　若ぐ　ぢめて　和を
ちくり　歌を　云ーたとある　ふ　ぢ　ぐ　蛍　花　ふ　遅　ぢ　ぬり

茅江

なきを須ろがさんと志ゆきよ烏江と云る海を見ごてせむべき
ゆうも如きおよとみこゞナニト云よ安孫子あく南海永匡
安合へあるまゝ伊ゝして敵よくあのさゞと問を見よくん
とゆきさはまり おぐろみさらふすろ毎度川上あくぶりを
おがしあのさとんの

永八

駿河者の文学え　　坂東

薬医者つあがじの沼るさ異さよあまり本陰よもぐみ結
くりを頼地来って伊の若もあく言よりいゝや頼の
中よて並ゝ云ん中の茉莉より巳至大英の教を高き

ちゝ見れば板中大よあり波平医者をとゞ見よゞどくり
いゝや大よよろまび沼ゝんと世しゞ茉でをうゞゞゞ板の中
よるとれくり見ゝ云ゝうとうゝうゞゞあよかゝゝまりゃイ
うゝゞみ今一度を言でくをいとゝゝゞうゞゞ大言よそ
ア〜医者を見るもゝゝゞゞゞゞゞゞゞゞん

永九

正　直　ものの　　我笑

ある所始末ある人ニテ人より世間のうゝさをゞ右り一人ア
ゆうハ板アノ常者ゞんとゝゝものゝ大ゝゝあのよんものてゞ
さるゝ云及の因よハなぜ罵言をれあとゝべゝるされべてゞゞる

見もたをやめものじやてハテ板式三百出せばた道ゑこ屋よ
よいのぢぢぢ　イヤサ常布番盤ハ二三百あれど大答が
そりふ分ク

十軸

祈自慢

笠井

三十石の京合下りひまて例のやうよ京大坂のせり
合大坂ものろいよハ何ぢとりふと図裏さ又ぢや様ぶ裏さ又
じやとめうーてもそ屋祈ハ大坂ぢや大坂よりく大流が
邪ハなれある為ろいて又ハ京の人さが堺滅ぶしし山清ゑの厨
景又ぐ〜ぢりいぢやとまいい台皆て大坂ハ又ぶくべり

行者の浦や清水の舞殿ぐ〜ぢ屋ぐ〜ぢ屋用が四で日戸や四ぢを
九ぢぐ〜ぢあろうぢあてんぢぐ〜とも月ぐるとふ夏京の人さもん
二ぢ月屋屋ぢとハハすハそぢだのうどんや伝をいてもぢ坂
のハハハぢぢぢそれでも京をのけさや結田全ぢや京ハ
とぢぢとまけあ〜みいます　大坂の連そそぢや大坂の出嫁のすす
やぢのたのすまめめでも帰ぢや　モウ　京ぢ人ぢとぢや
ぢぢ月結ぐ〜森入ぢぢぐ〜私も八ぢ屋ぢ着ぢ来るあけと
あぢ　大坂ぢ　さいぜんぢり合ぢさ京の人をぢぐ〜ぢれば
ぢぢさぢの奥ぢあり南ぢ三ぢ屋と京ぢ帰ぢ能ぢ屋ぢぐり

おきれはしさと接拶をれだうあぢくだうせんくさあさ
よりみ迄てへ、ハくまんざう軒さとりの大坂でも
おざりまをぬ

竹葉主人

本朝孝漢千字文

別点付

平野絵入　西板出来

本朝千字文傍註

山青八四益軒貝原先生の著述迄ハ遠ク近百年遠
宮濱より今代ハ至るまでその有年をあのめ人の長題
世の盛衰始り乗ハ徳ひ其次第を序てをうとしめ
左韻字を押すとハ同字をとぬき初章の終り
次

新大集、矣乗

豈ゝ於尹高ノ君竹撰

十七　月　たしき　菓庭考十二三七有　抑巴

おだく今の西へ往てあるとのとゝ孫ゞ祖父さん和れも
ゆうふハテ和尚とをへよ行のどやハ、イヤノ〜ゑと
じやあくあをもゆうをひさをそをめぐだくがひのとうアノ
やうよい俗ごまあれをもひふ笠をゆうハ山をとゝバ孫大
きふ笑ハワイワイく夜さうハ山ゞ見へめるの西とうたどや
ゆうく、ノウだくあちら所のみそのうを程めが出るゞ

おゝ是は祖父さんたぬさめ様まゝはて出やハテ珍らしの
ゑんかと通ひと拾て大かたぶそうぶさを着て出るハ
ヤイ　孫　濱ゝゝそんかをさそ　そをさゝかさぶそれるこの
祖父　ハテまれゝ拾ゝやかゝ　ゝまのこの

十二　きゝはさのいゝ　麻悦

コレ　拾ゝ家年越の祝ゝ日考ゝゝ夕の所へ飛人ゝ知ゝゝゝゝだん
ゝゝゝゝゝり入ゝゝゝり本ゝゝゝゝゝ

でかけをいたさんとすれはしさ ハゝゝ いゝゝ ねそろくと摑む
さうとも さうよかナ イヤく まるらひではなきらく
是ハおそろしき是をどはゝんでもあるへぬっと趣向のちからなる
それより汁をおろしてはしみられどぬるいあんまりやとつぶ
やきなり 插テ 子できるをほしさ 今候えば二三人会
男女し致しし世へ指さしのびてさびをほしくの院光善万事
まいりまんれ徳よ出来ん図まわりてやまめりませと念入
ていのふとまれぞ コレ これよ根よりあがりなれ
十六

月来 登　　里鳴

ゆむ[illegible]どもみく庶の角のまるみ者行ゆうて今後[illegible]海
家歌諸道奥まて行[illegible]時きく人唐ぬとんを名て寒て
居るとも[illegible]び盗人と[illegible]ちりたんものゝ引出又ハ押入尺ぎ
なぞさぶ月をども[illegible]ぬ[illegible]人もこゝ[illegible]ざあ
[illegible]よてたぶ[illegible]ハ[illegible]亭ゝぬとんの中ゝゝのくとゝ
ひゝゝぞ盗人[illegible]をゆメおのをさられが発ひ下ろ

十七　勧　るさず　たゝ

エイ〳〵エ[illegible]ゝゝうくん伯母さん〳〵いこうぞ〳〵踊てう
ちゝめハイ〳〵いとでざゝうまんゝゝふもゝゝゝおさもゝうざゝう

まゝおでさんホイとさんおさ出くゝふてアおさナアゝゝハ兵ハ
[illegible]ぶ〳〵さびうてゝ[illegible]ゝ[illegible]ぶざれくてアハ抱まゝよサア
くゝおさおでさんハイ〳〵くくサアおうがどんゝゝゝんせゝのそゝげ
さんものゝどやがコレくゝおんゝゝおとまゝゝゝナ　ほしちゝとゝげ
ほしておくゝたなされまゝたちのとゝやゝんナアおうがどんゝゝ
ゝハゝゝおでゝゝゝゝおでさんくゝいそゝくハイどゝおでを
おでさんくゝおゝゝゝゝでゝおゝうまんゝゝゝんまゝハイおれ
ゝゝとくゝ連てゝんでゝでさんせモウ[illegible]ゝまてゝおさをなアメゝゝゝゝん

十八　非人の左右楽　亘亮

大三十日の夜旅人者ゴ様の下よりうへ高野へ去まん酒
を飲ゴの上にいるゴ様のことを無礼のともるを見てアレ
おやだどの見やれあれも大ていでいらんあるを笑てハ
無礼よ面かやうん者ゴ笑ゴ有様がのるようあるを去
まいまいくらい礼よ出さんあるやらまやあまんあるを見てハ
おらくらくあるゴや無礼なるんあり礼よ行ようとも思らべと
ゴ様父ゴ行ゴてきらくハ待ゴさそぞ

十九　寛永通宝　轉く

扨もあんやはまゴのあこで二ト見もあるけるものでハあんとハ行ゴら

あらう踏ゴるゴ行ゴや小家様の見るゴを去ゴ灯のあるり
ゴ様ゴいるゴのと思ゴ様ゴあらう待ゴあゴ〜く奴よ挑灯持せさん
さくと来る是ゴ来ゴやりくお待ゴさ居出ゴ出ゴあゴゴ灯の明り
をちらゴと出ゴ下さりませイヤ此ハ去ゴ様ゴ用てゴ出ゴ出ゴく
面かゴきれゴバイヤかゴつゴいちゴゴとゴ出ゴ出ゴゴッイ成ゴるゴてゴゴ
ゴまゴん去ゴらゴゴゴゴ〜見よハイさゴゴゴゴゴゴ待ゴ代ゴゴゴゴゴゴゴ
ちゴと挑灯をあゴゴて下ゴゴりませ〜サゴゴゴゴハイ是ハ出ゴ来ゴ
でゴゴりまゴと懐中をゴゴゴゴゴゴゴ

二十軸　仮名の去状　東海道十七宿有　角抵

[illegible]

八幡宮の御とぎ　サア　松も去潮の方へ入舞ひ　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

常筆亭君竹撰　六義

廿一　南州好

右八葉庭考ノ二の巻の内十六番の型ヨリ有、

廿二　ふ合の型　或　相下

三十石の乗合にて夜中も居たまりの人々の

祖母さま風ふくよ小夜を[illegible]てよろくと指門に[illegible]

せしが若ふかり舟の中へ[illegible]ましと[illegible]ふ[illegible]の男

の[illegible]の小夜ぶんぶりと[illegible]れた彼男それ[illegible]

入るなるださ及ハ枝も葉のどくるるをちさと見ハ又素うんを
元出川のあをををこひまを見、掛てあ〳〵ひとりなる小男見を
さ及ハ寄ゐださ及ハ湯をみけさうあをうけさう

二十二　屠ゞ飛べハ石亀　冊丘

武士の名俗を正る乞食あるゆぎとぶもを上下とて太を
引るとし又ハ竹のさ枝をそぎて迷をみ〳〵久毎日ふ巡
て徒来のわ〳〵ゆ者ゆどゝ居る日武士人毎ふ合巡ふ
かの乞食の竹迷武士のみ引るよりふ底付れべ武士
大きふ枝を立ゆの乞食をさんくゝよ約ゐ志ける武ぎふ

たふ長ゆたゞくゝよ為る時ハ武士の乞食をさ及ぐくとゝびふ巡
れた武士も笠入ふ首巡て為り枝ゐ巡たる乞食ハ為足
も為て我小家為為るゆもかふゝび連の乞食をたのみ仲
百のものを巡くゝよかゆふふゝよもあらふゝと毎度失乞を
正るのゞや代後ふゝく武士の去俗を為るふゝ枝ちゞ小
為ふつをて去でゆらふさふくべ家ゐて命絶るさもみふくか
まふ者巡とゝふさうゝれる乞食かふゝてゝ武士のまゐ絶
みゝべ〳〵見よふりゆもの巡行年ゐゞ小屋ハ巡れ為ふゝ乞
よゝと為さゆふふれもよ連の者ともゆ入をゆ〳〵ふのふりふ

のせて二人してかさねぐるまいくるまを屋の下よりいと家来ども
ふくろのヤレ

二十四　余所の無ふた　林子

塩ほしの日ぬ門口かくす天満のかまぼこ屋のいまのまぶるる
ゥかゥ　ヤ、見ハ茶屋どのよりぐるあそばしてお出ユレよりふてでハ
あひ毎節季毎月毎日ハ人合せて為ひて来さ　ヤ
ぶしてはるるのどや　サ　ゆたどや　おりし家ハ余所の内ママア
あちの内へ来てくだされ沢山まうめのそふふ日ハ人どや
家ぬう天満まで浄ぶ為くめをのどや何どやいろとい度

家で伝さてくのらいまう　ハテ　サテ　ハテ　ハ　ハ　ハ

ひとまぐさ打ち出すはしてきまうと袖のべひしめうあづさ
さかうあらべ品を拾ておかと出と例の内は第を後されかへ
お節あんでもいと殿の内は箱ひさしあてあつこ有茶でるふ
と海とあがあやいあや出てふなりてと蓋をあつけだ
あるいろは姫よりのこぐらまありびくり滑まさあうは
ムまくらあしく海底をうらわーそふまアノ触よ

田作　柳枝

九十六　奴の海

コレ六条井きさいまりいあ方竹ぎさどや一附さ行づく孤長や
はふ入十ぴ行けてのまべ武朱混をつ海うびよ至と波そう

たそ来　されいなるうるあるあるあ

ものなきまれびと檀中のかの浪でもあ
らかうとあの盗賊をどう心掛ふつとはずでとのいさりの白猫
ちりうへめ仙ゆうゲワッ ノメリ、と落て大きなる生鮮をひつつ
しをあとをたゆ付ゆめて花かりくぶんの鮮をせり合ふ
こんりうだことに兵衛ちん仕指も兵衛のあをさだちとう
つむて落らるるゲ兵中もいつまれてもるゆ上なんあく太
と孫こくぶんの蛸を冷兵衛ちゃう仕指りのをありつけて
ちゃうふ人の兎のと

古八　　食楽

あしたよりあを涙と由ふべよい茶をたき物くの老ざう退付
ゲ老ざそ又後仕十人別も笑面一指表余りの傷今面と表
比をる友達又お侍ちれば友達はたこ人ゲ流川菊の恵いゆ
ふ流よてむりんのゆをはんてこ面ゆとい全大今を出一さ指
あや市あ八一はきゆも出をふかものゆサア もちゆふ流ゲ
おざうめ友達それ表指ちの高慶通ゆ兵ゲうちを
ゆふ流のゆうはて今力乃身て小判ゲ当今お病のさゆう
め目ゆ表はう表れとまゆらはこちゲさ又ゆ解るとい表ゆうを
をむりんのゆと仕ゲ一面をむりんのゆさ又兵流の今を

山西へ去ぬるとこゝろざしてまいりたるに、はけ口ざや名ちゝ小判ゝ五ゝ
〆ゝ五ゝ目と申ものあつめて三ゝ分ばかり又一ゝつゝさぐりて武
家様もゝ〆ゝ五ゝ目と今一ゝ分ばかりさぐり拾ひたしゝゝと三ゝ分ばかり
今度八カ一ゝ分ばかりもらぶけてゝ有ゝこゝ長ゝ屋ゝ
ゝ居ゝ三ゝ武家三ゝ度目ゝ有ゝこゝ屋ゝ長ゝ屋ゝ
ゝ有ゝ所ゝ屋ゝ敷ゝ屋ゝ敷ゝ屋ゝ敷

とりあつめ枝くさ千月てもおりあつめあへぬでとにぶ毋さ
庭前竹ぶくやんせて孫のよのさぎうあぶしいあかう
竹細工屋ちぶ屋と後を立り居うさ世のう実人入ば
こ屋問人　竹細工屋　火鉢　孫のよをさうあさぎうあぶ
廿ア実一貫　実人　鶴人実者と淺とと人べ　竹細工屋　右う
ちうそだくうさうしておさちぎうさんぐ仕ふ者人あ
されまも　実人　ハテ　おそふ屋ふ湯戸を叩さまし

竹葉三終

立春嘶大集巻四

常市筆亭君竹撰

三十七

田舎氣質　政義

百性共家家屋敷松竹落方へ寄り出ぎうまんう
出ぎ家でぎうまん私牌共松ぎまん殺さ世ぼうう伝ぞに
よの名を付とぎうまぎとぎ私ぬび屋屋うあぎぼうあぼど
たくぼいう名を付て呼ぼうぼとぎぐ出紫してすいよの
名ぼうあん世伝のとぎぎうまん勢法家の二部とぐよあう出三
びのくうしまへう伝とぎのてるむしのぼいまぎぼうまに

[illegible]

うらがの藤おとこ[illegible]

あんまりおそろしかりまんいハテサテうらがおろこたのの

揚屋で接ん[illegible]合の人をいろも[illegible]

三十二　道心者の指道　布生

紙入を落しうろくをまつ[illegible]人あり[illegible]

道心者一人来り曰きづ知[illegible]ノヤハ[illegible]

うろくを[illegible]

ハテサテ[illegible]

修道をさ[illegible]

[illegible]

おざるてやソレハ何で[illegible]

を紙入[illegible]

ものじゃそれでさ[illegible]

[illegible]

[illegible]

三十三　聾耳の口鏡　之介

七十余のはんぺおやじ[illegible]

あるとてうこ歌をあそびひとれば女めさうとこえおろう
おとめひらくてサアー口をあられとつる雀おどべば
く云られどそんと爪くざれべコレ彩ッさんまをいとこをかて
仕形するんをまだかのおやちわりあくびおれどまく人
じやあれようひさあり
三十四

いうりの

厳　尤又

恋義の梅を傳ひうりそさみそれを見て旦那方さ後
を三人三を作アし色ちられかてまりまりそはとこを
巳蜂の屋根あぐり又さび傳ひ十七八ぞかりあるを

きぬがゝ刻だきみそかの梅の枝をれ体あれば人こぞの梅ゆ
ほしく
三十八

浪　毒

奇　友

田舎道若四五人連まそ法の社へまり居る而下よこ体生さよ
まぐれけちさ男が梅とあろ法てやくこをやりく見ゝ梅と
ヤ市之丞でおざりまんを宮でどんをうあくえる法とつをむし
仁徳天皇とつをろがるきやまのやりて五色ゝ徳ゝ氏の
あまどゝ振ひまあり そうと振ひまさ而でそう人の之でそう人
ちとの之まりまんせ ハイくイヤヤ三ゝ法ゝ振ひまりでゝ

おごりまさめあか　そぶんあそんなるひ　吸でゆ　子ものしくだんあ

二十七　おく　じ　後　路島　舟

あちの旦那まぎまぎや　酒あつと　酒あのてきりいそ　ど　後　酒

じやてや　あんまあきの　おの　ふ　酒　ごんきまの　好　あ　酒

のあうまをちと　鳴きし　ゆきまの　あを　蕎　天井　はじ　酒　後

門の　指　ぐ　虾　じまぐ　ぞ　板行の　まん中　戸　縄　の　ま　ん　ら　ん　り　と

酒をまのるとても　熟　の　あ　と　ま　猪酒　さ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

よりかまるめてや　フウン　ほ　ん　ま　き　の　い　ま　り　ぞ　ま　ぞ　き　ぞ　や　ぎ　ん

あう　三　度　く　の　あ　し　ハ　ナ　こ　な　麺　ろ　ん　ど　や

三十七

春の述懐　銀朝

武人倦るを忘れるのまよりおりろふまり倦屋を忘れる
屋を建てるを六七疋ゑ二疋をのく家居きをの代代
をるのり迄今八敬おっ力も高く味ぼうぜんとて形ら色が
低く海ぬ寄うまり一家中へ従てお侍よ及いんと栗毛の
るよ幽いと寄て敬を打行ふちだ方の小侍ゲ侍よ八ゆ
一さんよ赤け色よどふちふくんけるるいあ兄て旦人を寄も
しよう人数とりおきゲ兄のよをまり新よ方のまとゲとくと

三十八

笑ひ顔　里麦

正月二日高麗えじめ居びくれ通ひくだりと猿蓑中よ
なだこのんたるる西近西のまゲ伯まさんけ野色ぶ宮ふ
ふそそ八礼よりとと八べョ、大きお浪まゲや兵でん法師通
さ八ゲよりまよだ寄ろとと八べイ、エ山まよ野ひ指ていて
も方海のうう味と八やさりしやきは

三十九

梅よ鶯　相玉

家よ流利の聲実ひきゲめの命をまるとて鶯ま寄も神メ
人も青ゲう集り俗くと石人の勢指サア今ゲと夜の
なのふ云えと法海の連縁いさめ兵ふ兵心耳をまるし

春のまより出でつるやゝ柳子も合しをとうゝ為るみちの
川と流て為る宮中へ祇さ多の長ひさうぞめと出て宮めてきん
でなるへしと東西も学くどうくと見浦へ為うわら法法の
きんてをとこ見がフトこの春うぐを出てのじいち歌て
いつく義の分さむへしゆーやち

四十軸　鏡の笛切　家橘

遠う九州うさの人公家衆さ人百連中の為をよかりゆ義を
借り遣員の内人舞りとして綱と鏡から色百うの級来り
見へ見ゆる者と参れいかの赤未たものをさ為て

此ふをく去きものへ行とうゆものと問を見へたもとてかまはこ
おどよ波しよへ者といて並りる為ゆ中級の来よ
百よとゆ分ゆ為ゆ根中級よりしへ八聞先行のとと
ゆうをかまはとよ波せうと問りを見れへイヤ答よてめを
楼はよて更へ渦ぼとよ波ーはさ　竹を四紙

此更へ書法ーは根為仕れ　さ　牧摺
義本添

投佐義早ト筮

此書ハ一二三四の切形の八ー義本三本を赤白
更へよとち添て根義よて人の死の上者凶禍福を
述変実を不方との若更を初ヒむる方白の書あり

年忘噺角力　全部五冊　[illegible]筆絵入
　　新板よみ本

安永末の頃新清水観音堂納の大おしを
長本対山椒本予南来撰して浅草噺家の
初席の本番中　正月二日より出し座中山

少源新話集　角槌軒素従撰　[illegible]筆絵入
　　全部五冊　新板よみ本

右八噺家三席目の噺大集と三席目話大全との
名異堂蒲の撰真或八六月七月比の暑を忘のぐ
新話集七月十五日より出し中山求めに応じて[illegible]山

新撰話大全　全部十冊　[illegible]筆絵入
　　新板よみ本

噺家三席目秋の夜あり[illegible]比[illegible]様彩巾慈向の[illegible]
[illegible]会数[illegible]恵板[illegible]本[illegible]上山

立春噺大集巻之　常筆亭君竹撰

花多一斛　菓奴

立花ぞろの人逝くれば[illegible]を含むるが如く山人[illegible]て
諸本見世[illegible]紅梅[illegible]の枝ぞ[illegible]おしるるを
人見て切なるは此枝よ[illegible]も[illegible]
[illegible]主人[illegible]此枝よ[illegible]を立ば
[illegible]と云[illegible]の花[illegible]
[illegible]切[illegible]の村[illegible]

あのまう見るお梅見しよおくれおまもくれいと声くよ
見めきたれば山吉よおくるき魚屋とびさらぬ主人の
いちく見ようなるあとの姿山梅よえおがなくて
くもらといつまんよ

（四十二）

ふ　食　紙　　蓋　み

元禄八年の三月ものよて今度はぶんと腹中ふ
よ刷はて成後五年ふ歌もまくおざるテかの流
亀ヶ今度ぶまんと後中よおざるてやト仕ふ信ふ
吉ふ仕しき男　ハタト立ちを打ハテ道理をよくせめ

ものでおざるさほど功能あるもは多あ西日出度国はて
おざる院よるヤ行中の書よ　ア！後蓋の表とまで
いて弦八ハ元ハ本んざ

（四十三）

笑　ム　門　　梅　子

年九の孔子ふ歳じまきこ八ひしおいつまも日梅ふ流り西
ゆもひ和おざるこ二ヶ日の多西庶戸住しなまべるかるる
色ヶ後沢ふ二三勢日と呉八寿ますまよ中ものが見
さうおざりまん何盛行多つ多ハいどこでおざりまん本通ふり
ふまよでおざりまんと呉ハ礼者へくさるあるべ西戸

四十四　毒ゲくさとり　朱桜

右八葉座考三の美く丈の世之有

四十五　油　乃ちがく　如雲

正月二日より四方の鳴金の音出られべき人式をもと
め相ひ〳〵ときまとに勤くることとて附合内の先く〳〵右の
鳴音を奏よりて邑がつの先きく〳〵乗り一つも張り出し六
三十石之音で出さんとて大佛殿より音合之のり鉦出
やい者面義之り風邪の鳴など出ろく出ける内
こ示合の中より相高正月二日之鳴之の音が出て之内之

相ひろき出ぬ〳〵ことと出合より鳴り出られば彼人
合人なるり鉦コレく鉦どのちかと鉦を分て下され

四十六　鈴　馬　両

去鈴屋人仲ひとき張居おどを求める本仏を細さ
ぬどの多ゑうさやう細ろ鈴おぶりませあ多之鉦まぜう
うあ　サしハ出合ゑまんと思てことを居中うろく見也
式人案りまて三す四りぐらの鈴鈴を人分見く貴人の相
ありと出ていりあ鈴りがけ之途中ゑて友達之出合見
いく張居さ多ぶれ出合きられはてと者掛られれば

コレ中らじまんなるもの業平の系はとくぐんのぢやぢをえん
せられぬヒヤア中ぢ泉みでも出来はもるうイヤ
くさやうあるでんぢざうぬ徐をぐそ也ご何よまるれなた
リヤ きひものでおざりまんて ハテあら手拭いづきへおもり
ゑれまんぞコレハ鏡を入て急へたらへーまん

四十七 推量 ちごひ

右ハ業平遊考四十四の巻あり

四十八 馬次 玉恵

るまさらひの侍を接を人まうるを為外段氏ゑる時有

ある日之人より使来て先達きて一宿るよ示唆べきもの
中来るかこまの有きこころ人召れ是非おく物の馬よ所さ
ぶり一ト駿ハ代の者弥よ出さ一さんよ出りもれ出しも向
より明友来りふーぎやアノ人いたべるるのつるるの人者
つよ行ものどやきらのとるる逝く来り声をかけコレくまや
馬よてもの方一切やきるとこ向へ出るのよ出ものこと
されはよてもれ出べ行ものハ来りもれまをれ

十九　文郎の風味　芦言

信の国の去文良訓傑のあるよ向げられ十日成よ今文へ

竹雲ものこ来り名ぶ表迎さ立ものの石橋のこよて出ぶのこと
押されてやこと出ものよ井池へこまりよ文良ハ出さ嵐の所
来りぶ来ものよ来ものよ来ものこ来ものこ来ものこ来ものこ
亭ものこ出ぶ出ものアハ神戒ものこ来ものこ来ものこ来ものこ
さう月出ものこ来ものこ来ものこ来ものこ来ものこ来ものこ
来ものこ来ものこ来ものこ来ものこ来ものこ来ものこ来ものこ
逝ものこ来ものこ来ものこ来ものこ来ものこ来ものこ来ものこ
来ものこ来ものこ来ものこ来ものこ来ものこ来ものこ来ものこ
来ものこ来ものこ来ものこ来ものこ来ものこ来ものこ来ものこ

五十番 鶴寒尾

はる風　　鶴丸

笑さ及よも風色しるのイヤモ大よりほさ山笑八ケかな一ワ

ようふ淡しる風者でも世界まる山近ぶでらど今ケしさ通め

一風裏ぶぶごりまんぶごちまさ風のの更れもかのてありまんと

のふ彼らしやちろびにく咲たちのとあれハ花ハ

世若男ほまのまんとあんまの風初おりげて大分後のもさまは

てぶぶりまる初くくさ度の風ふきのの更て花まりんぶ年と

よいの秘密おものでも落ひさまるる秘のんぶ風人の

横田氏

解引解

万三千三
八十四
明治八年八十六